



後編

下

中村俊定文庫  
文庫 18  
213  
3



つとむる花



綾錦卷之下

三十六番句合

一番 左 首歳不二

蓬萊や巧る歌の山山乃山 露沾

花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪 花の雪

右 春不二

名を回し 花の雪 沾涼

○新勅撰 身延のたの記云あ井の

碧海初遊多少客 富士不取問何山



沾涼緝



二番 左 菘

燦々たるいたり かりの菘菘 吟市

○枕草子 春海めりきもの柳のこえたるまき  
しそやうよかきこる文つぎなるひあこり  
ねしうらめたる又えくの枝つける

○世談同答 正月、女湯の月こし又七日、女湯の敷  
よて胡をを始ぬのあまにまきまき宴會を催く

右

みよき者ん家のそとにも雪菘 沾涼

○古今集序 人九、赤人のみよきたんのかう赤人  
人九、志もよあらん事かうたえあけり

三番 左 梅

こゝれ志めと人をそとるさぬ梅の梅 東隣

○果堂禪話 梅、花、惜、入、師

右

むらさき 立ちまき 園乃梅 布仙

○碧巖集 隔山見煙早知是火  
隔壑見角便知是牛

四番 左 初午

一日の水江と拍子ききの午 魚路

○杜詩曰 魚吹細浪搖歌扇 燕蹴花 落舞筵  
○千載 三室山谷やまのまぬらん雪乃下水  
中納言周信

右

ふゆや 一日えさる 秋の菘 沾涼

誰教計會一時秋  
風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜

五番 左 くれ

をのう雲あんならう雪は花盛

落く

○丈本抄 風あけをのうをよりをのうをを  
ちして見する心さうる後京抄

○徒然草 花のさうりい冬至より百又十日も正  
より廿七日もとて立去より七又百おのや  
ぬり

右

花ら新や 言ふ子の拾遺の上

女 臣女

○枕草子 三つそりなるちこのいそれてい  
みちよしとちいさうちのありけるを  
よるあきおしけたるをよむこと  
おとろくそと見えさういこと

○未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>學<sub>一</sub>養子而後嫁<sub>レ</sub>者也

大学

六番 左 くれ

今朝とむりある日や山はる

水戸相

沾鱗

○新古今 後鳥羽院

桐のくさ山さりのあう尾のさうく一日もある  
いろくぬ

○まうやらん花よ朝寄夕暮に宗祇

右

このふん目にはゆりさ横下 梅五

○詞卷 年を経よりけしよえなま

目よあききさのさうるあま

七番 左 くれ

夜乃跡さそい松にうあしよ 琴夕

ふしあきさけよそのあたるよ

○金葉集

桐風の香せりては庭の花何よりかき  
るめくつるよ

良暹法師

○續古今

明月をみよまきりて浮ぬせりて  
くもりの舟に

秋成法師

右

庭白く鮫鱈見えん夜曇る 沾涼

○拾遺 古の浦の庭を白く浪をかき  
いんぬ人のあえ人丸

八番 左

心吹や又拭くくくく 燈り 東巴

○新後拾遺 心吹の花こそ波も口かきくく  
ゆく井のくく川

○安名抄 井堤の大臣の堂にひくくせ焼作らま  
そのまよわむくくくくくく心吹くく

ええゆりきその花のまよわくくくくくく  
いくくくくくくくくくくくくくくく

石

心ぬきよた乃あくひの日脚外 沾涼

○遇鄭山人所居 寂く孤鶯啼杏園  
寥く一犬吠桃源

○又本抄 心くくくくくくくくくくくく  
いぬのぬくくくくくくくくくく

意者

九番 左 ひくく

九万里を登りて今 浪雲雀 正典

○歸去來辭 鳥倦飛而知還

○莊子内篇 北冥有魚其名為鯤 鯨之大不知  
其幾千里也化而為鳥其名為鵬 下略







十六番 左 夕立

越前雷中  
北仙閣

夕立や 瀑のうらりて 湯氣 南花

○若紫卷云 雨さくし 打そく 死心く 雲ひや  
わさくさく 瀑のよきと さまうて たくさく

右

夕立や 下隅さくぬ 武藏 沾涼

○菅家御集 夕立に ぬきぬき ありきり 夕立乃  
さくさく いろきむ くの原

十七番 左 あつこ

獸乃耳に 骨ぬき 異さくぬ 一店

○走獸ノ中チ 象ノ耳ハ 異ナリ 異物志云 象ハ 身數  
牛ニ倍ス 鼻。口ノ 役ヲナス 馴良ニシテ 教ヲ 義  
言ヲ 听トキハ 跪ツク 矣

右

石煮へて 牛のあをのく 異さくぬ 梅五

○夏一日 極熱天 燦石

○格物論云 牛ノ母ヲ 牝ト云 父ヲ 牯ト云 子ヲ 犢ト云

○人ハ 牛ノ角をさく 人ハ 馬をさく 耳をさく  
そのさく しく しく しく

十八番 左 蟬 近茅屋

蟬 近茅屋 水戸 沾橋

○智度論云 春未 夏初 以時 熱故 小眠 息除 食患

右

夏吹や 蝉に しく しく しく 沾涼

夏山の 推の 糸く しく 付て 耳の さまぬ しく 蝉に

十九番 左 粉川

人乃其如か申さるるも粉繼り如 逸志

此川より取ゆけぬしつゝ粉のまじりたるなり

○智度論云一切室中命ヲ為第一諸罪中殺生なり罪ヲ為第一諸善中不殺生戒為第一

右

白髪入るいっさ海あり粉船 涼之

○莊子雜篇漁父 有漁父者下船而來鬚眉

交白披髮 揄袂行原以テ上ル矣

川のまじりたるの粉となりぬる氣とて花の如くとかな

二十番 左 夏北坂

かゝるきの扱もやどぬ里のそと 水戸 沾渡

拾遺 かのたのみのこゝろ雄のこゝろひつゝある君ハ

○土器投 廿二丁目より五六丁目中なるる

右

いさきり如丹波元おろす汗拭ひ 沾涼

○神社考云 玉城、西、山名、愛宕山、秀出ス 於嵯峨 万仞之上

○三十二丁目 笹原と云ふより丹波圍眼下は

廿一番 左 一葉

秋父、小川

圓城へて荷れを落し一葉外 沾播

○淮南子 一葉落天下知秋

○千載 却下いさきり如丹波元おろす汗拭ひ

○東鑑云 文治五年七月廿九日白河の園を

園内神子御奉幣。此乃是季を以て當時の  
初秋なり能周。古風思ひ出さるやのり  
伴出さる系馬をひく一首を録す

秋風よ草木の家をこもりて君の熱き心園中を

不破 菅光院殿富士山におもひを録す時

あそびたりのふ園中も玉もあはれは

うさよのうさよのうさよのうさよのうさよ

月をて月をて月をて月をて月をて月をて

右 鮭乃一葉うね 沾涼

○東鑑云 文治六年十月十三日遠江小菊河宿

おのづか依々本之郎盛徳小刀をお副鮭の楚

割を折安し居子息小童をひ侍宿よ返り

進す申す云云只今削ぐ食せしめは不氣味

さきさき懇切なりと申すさきさきめさきさき

おのづか依々本之郎盛徳小刀をお副鮭の楚

今海鶏ト云

廿二番左 聖さく 祖泉

聖さく卷云。まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

まのやうに。よりもあつちくさく

廿三番左 月

月清とて推紫醉里南磋峨 千楓

月清とて推紫醉里南磋峨 千楓

月清とて推紫醉里南磋峨 千楓

月清とて推紫醉里南磋峨 千楓

月清とて推紫醉里南磋峨 千楓

ついでに物のつひにさきまをよのまはりの任よりきり  
○徒然中 望月ゆく幽なれを千里の介まで秘  
るよりも曉ちくはなれてすらりてさるりて  
んかきあをさるるまはひくはくはの木の  
つきよええたるまの宮のうけしりしける  
ひくまかまの海とまきぬくあまを推は  
まじりたるのぬきたるなるそのよまのさし

右

我池のこきり月し 蓮の茎 沾涼

○新明 月はさかたも今月も人も  
え 宿の池のこきり 清水屋院

○愚問賢注 只常のさるるのまも人の業の及もぬ  
まなるまをさるるまよむまよやまよま  
月のさるるまをさるるまよむまよやまよま  
りまよの風情のさるるまよむまよやまよま  
りまよのまよむまよむまよむまよむまよむ  
出る月ふけとゆるる 下略

廿四番 左 冬丸

かきさるるの酔るるまよむまよやまよま 文岳

○又本 秋酒のまよむまよむまよむまよむ

○詩曰 坐對賢人酒 鮮于輔曰 醉客謂 清者 為聖人 濁者為賢人

右

つむぢらほも 曾子の形うや大冬丸 沾涼

○參也魯ナリ 程子曰 參也 竟以魯ナリ 得之

廿五番 左 ともぢら

ともぢら 一入屋 一塔の屋根 左隣

○僧祇律云 有舍利名塔 無舍利名支提

豊後府内

右

とみちよるを鳴るやささの秋の寺

梅五

○品川鮫頭補陀山海晏寺とみちよる

○新勅撰

ひりー 彼がたれ様の持して

よしゆをまの山とたきる好京抱抄改

○鳴送孟東野序

以鳥鳴春以雷鳴夏

以虫鳴秋以風鳴冬下略

廿六番

左

旅泊麻

名取の舟を揺る中麻の勢

水戸 沾瑤

○秋夜宿淮口

風帆幾處客 天地兩河星

樹靜禽眠 沙塞麻過汀

司の...の人の舟は海沖に...  
右

とみぬ 撞麻よるや 破まら

沾涼

○我々の里にいていもよるの夜を...  
三井三謡

○日本記

黒い髪は...のやあの中は男麻とお

さうや...こあひ...せあ...らあ...よ...  
を...又...と...ひ...れ...女麻の云...  
...む...物人...あひて...さ...皮...  
...を...を...ま...ん...あ...ん...ひ...て...麻...  
...を...り...り...あ...お...ひ...あ...より...  
...ひ...て...え...れ...て...あ...す...あ...と...の...  
...を...付...と...ら...や...そ...皮...を...ら...ら...  
...と...そ...よ...若...を...号...と...云...麻...の...上...の...  
兵庫也

廿七番

左

秋海棠

待...の風を...

皓魄臺

露庭

○推徳興詩

空園孤燭夜

羅帳独眠時

○新明題 月夜とつそめあつてを頼つ  
くろをつらき花の夕ぐせ

石

是もまゝ杜が母を収乃るれ 沾涼

○詩話云 杜子美母名海棠故集中在海棠詩

廿八番 左 落葉

松の脊より風を吹く落葉の系 巾車

○菅家御集 引おそれそなきのこゝろ  
あけてありしをともぬ人をも

右

今朝りり甲斐の葉や田子の浦 布仙

丙辰紀行 富士川海乃才一の急流なり 下略

○新古今注云 後深草院の四時之の秋のそも本并は海より

紅葉流氷といふをよまゆりるよる京師宗朝  
歳士よ海よりいふ水といふもりや 慶のあしそ

廿九番 左 ちりり

海而へひよるり 誠如ちりり 賀朝

○鴨谷越 須戸の北よりんあらし武庫より  
かきぬのまゝの浪をさるるをいふも

歌枕 指聽 半夜鐘

右

ぬく星のふほるる 暮れ道中を 沾涼

○次子巻 見しのやまのまぬあらしの  
あらしのひらり 友らりしをさるる  
あらしのひらり 友らりしをさるる  
あらしのひらり 友らりしをさるる

三十番左 六六

イセ津清水村

罪歎てきく素男の巨燧イセ 東沙

○撰集抄 むし中納言歌基くは久保公家帝  
乃時成流せしありと死なむて死すあり  
をえとやと涙をなむあり

右

之方ハ箱ヲ負女北ふるぬ 布仙

○唐詩注云 賈直言坐事退嶺山妻董氏云  
昔死可別嫁妻不各引繩束髮君非手  
不解直言賤三十年還暑帛宛然タリ

○伴勝物談 一とてむとむし一帯とむし  
てあゝるちとむしとむしとむしとむし

○万葉 心なり我下細のむしむし人  
まゝとむしむしにむしむし

世一番左 六六

まゝとむしむしむしむし 橋の上 雪朝

○新明記 一むしむしむしむしむしむしむし  
むしむしむしむしの板とむしむし 道晃

○温庭筠南山早行詩 人迹板橋霜  
鶏声茅店月 人迹板橋霜

右

結まのむしむしの姿むしむしむし 沾涼

○月落鳥啼霜满天

○新古今 月落鳥啼霜满天 沾涼

世二番 左

笠重子、雪のふりや花えほ 音里

○白氏文集 与君結髪十五歳

○詩人玉屑 笠重兵天雪 鞋、香楚地花

右

髪、香やふりは、めの糸柳 布仙

○若菜巻 ちやのひきりてをのえはほりて人より

ひらひらとけりけりてたのそとあつちす

二月の十日さうのち柳のこころはさうは

さうの月をさうはさうはさうはさうはさうは

世三番 左

我ひさり 松ゆき 思ふや丸合羽 凉宇

○いよひ日記 中ぬくまのこころはさうは

さうはさうはさうはさうはさうはさうは

さうはさうはさうはさうはさうはさうは

右

雪、松ゆき、おのこころの富士 涼

○さう、富士郡 為家

梅の根いささかさうはさうはさうはさうは

○むつと城山 ぬち

梅、さうはさうはさうはさうはさうはさうは

○さう、頼姓郡 ありあ

山、梅はさうはさうはさうはさうはさうは

さうはさうはさうはさうはさうはさうは

世四番 左 ぼく

紀州若山

方圓のまじりを修め銀竹の如く 一軌

○又本抄に井筒のほのほのさかぬまじり  
とやうにもさかぬのさかぬ

○水、順に方圓ノ器

右

凡、研、堂のりきりつ 梅五

風磨石、氷、ハ、塞見

○文選宋王風賦 其風中人狀直慄慄淋淅

○新勅撰みよしゆのほのほのさかぬまじり

○宗祇公不言角い坂より扇筋を一里ありて

よつて坊あり藏王堂とくくよのまじり

あり坊あり扇筋のまじり

世五番 左 ぼく

月、まじり、も雪白 未石

○無門関云 春有百花 秋有月 夏有涼風 冬有雪

○枕草子 ころは正月二月四月七月九月十月

とてまじり

右

雪の擾乃何取馬 沾涼

○延喜式 凡諸国驛路邊植菓樹令往來人

得休息

○一里塚ハ織田信長也の三十六合を表し一里と

三十六町よきまじり

植しきり余のまじり

板をくまじり余の本板のまじり

世六番 左 歳暮

人もよし我も花をみるの事 五首武

○荒木田守武世中百首よ

世の中の人をあらとむるを遊ばしうと人見ん

○西行賦云花は依風散人依友知情

右

信濃なる歳暮車やうら上 沾涼

○流汚湖の氷のくを靴をうらなる人馬住まをよ

○迷異記河氷始テ合ス靴先行テ後渡ルコトヲ得ル

靴河氷渡ラシトシテ水声ヲキイテ后スグルト也

○此三十六番の句合の事を述べて渡すにあらは

き古詩古歌古結句の心よりある事

○他國宗匠大略

●貞徳—良徳—良保—常矩 又李吟門ト云

和及—竹亭 現暮四 石島菴

物々々々々々々々々々々々々々 和及

きよ水月智至と閑々々々々々々々 竹亭

下扇や小去の麦の腕まき 京 暮四

●貞徳—梅盛—信徳—信安 掉哥奇去安卒

そくゆ—やゆ子いあむむ時 信徳

信安 京

●西路沾公—沾徳 現仙鶴

五月雨 京 仙鶴



天正年中伊賀久米郡主菊岡丹波行任代

●行宜

菊岡隨性軒

号有髮如幻

行尚

畫程舎

以実名爲法名

現

房行

沾涼  
實飯東三院男

現

行重

記之

現

行

有隣

世談一統三百卷編書其外述作有多

伊賀

久米乃袖合山九品寺に存命のころ

●碑をまことこころをこころして

隨性軒如幻

きりぎりすの神合ふまのけりあけの生の唐かみともえ

五十果の春浪涼くくまふふ

菊岡

行尚

漱百そのかひけの今朝の去

題 曉鶯

伊賀

菊岡

記之

くくふすや新の八考比同よる

享保十三申の初夜布地故つと新くよけりて西を  
對り。氣屬多し。一類舎まら時

伊賀 菊岡

尔種をアんせむはりの夏木立 有隣

故園今石もたもろ 楓 布仙

○勢刈山田

芭蕉門人

影さぬて 枝や青あり 乙由

團友山田

雲とたれおのるをや時 芦本

○紀列之連

須原 垣内

ふ里や 鴉味口借し 環山

式人なるはよりあるを得

ひさよせとねとくを柳り 冬嶺

目下於此あささささ被る

湯浅千田

鷺舟

吹海雪の夕やちれ乃酒

垣内

守株

嬋娟鞠をくまき柳下

豊山

心を越えし海軍の志

物一齊

るまや専らまら系つて

山茶井

じりやむし乃被る乃京

鷺舟

梶の葉子あや海軍の志

環山

名に朽かた男や髪の照

守株

徳釣竿に成海軍の志

豊山

海軍の志

名月や魚さささし釣るも

冬嶺

糸上女花巻を抱て月歌多

山茶井

こゝろおきつ 深心の産物

積つていふ上時雨のふるおき

雪朝

一段天乃さささささ

沾涼

塩魚の荷より夕日の帯して

布仙

海士の浮場へ物ささしと海

雪朝

籾を研り次馬、神ささし月

沾涼

菊と豆腐の仕やささし

布仙

菽入乃先急了成乃大おん

雪朝

裏吹巻のさささささ

雪朝

むし言を鷺鷺にささし好事門

雪朝

紙袖の枝一つささし神楽

雪朝



その梅子五脈のくわ花北条  
世のむよに勝北二月三月  
布仙 沾涼

題東叡山鐘

雲の満く空を吞や 甚五郎  
雪朝甥 石内氏 叙叟

師不知 松木氏 宗因門  
政則 音雲 蓮之 文雅  
同苗 同苗 同苗 同苗  
長子 長子 長子 長子

毛吹草の 散花 後やみのまの梅  
政則

江戸八百員入 天物もやう 時毛  
音雲

續江戸後入 何人の彦寸 彦寸 小原村西  
蓮之

神主と大根 掘せり 落葉川  
文雅

七夕

七夕や 藪の底は 娘あり  
卜宅

輝きて 火縄は 遠く 星乃あり  
梅宇

天如川 みの 荒川 とも  
沾涼

心身を 今宵は 夢へ 夫婦 星  
沾涼

借りて 来て 星を 借り 野原 由井 仲は  
涼之

煩悩を 一夜に 流せ 天北川  
李條

一目を 力を 海に 天乃川  
麟石

か徒歩 糸の 身なる 幾夜も 銀河  
仙理

牽牛や 枕の 心を 見る お月  
素琴

屋根 葎の 出て 知る 今宵 星の 光  
左隣

後継 云 男も けし 星の 川  
柳絃

沾涼門 杜氏 吳竹軒 五秋菴 吳竹軒 沾涼門 左隣 素琴 仙理 麟石 李條 涼之 梅宇 沾涼 吳竹軒 卜宅

朝類

あさる月やうさ茶碗の竜田川  
 知る月や羽麻の人の福の神  
 あさる月や尾忌女の抱子桶  
 羽麻や磯子魚取の夏半  
 あさる月や傘張も垣子干せ  
 ありとくまふみしを  
 ありとくまふみしを  
 あさる月や夕べをまぬ女後の羽  
 羽麻や夕べをまぬ女後の羽  
 羽麻や夕べをまぬ女後の羽  
 羽麻や夕べをまぬ女後の羽  
 鶴亀上流の月あり土用干

千翁門 水光堂 瓊角  
 一風 有林 中車  
 涼宇 嘉祥 山丹  
 蓮之 琴月  
 沽徳門 沽津

月

月を新茶はけりや細路  
 昔の月を夜う鳴けりや夕の月  
 今宵の月を曉うきてくまふみし馬  
 名月やあさる月をくまふみし馬  
 里の月を頃上此谷宮中  
 世界皆昼を楽屋よりあつ月  
 きの月を常上え猿も子を放し  
 名月や遠く熱乃死も死  
 名月やあつ月をくまふみし馬  
 月ひら陰をくまふみし馬  
 有明上長や虫乃あつ月

逸志 壽角 上宅 丈岳 魚路 鶴史 安祖 夕佳 有佐 大和郡 山云 萩葉

月

百補之白隠 玉リヤキの月 竹裏  
 名月や無一さちと家来此子 吉田氏 琴月  
 夜目を目暈忘るもよしき月の 北尾氏 賀角  
 月沈や玄菟よつら草北系 竹田  
 侍育の月の物久く之つ補忠 竹  
 月なきや仁王の後と疏あり 信州 辰次氏 三省  
 毎ちりおももつらう 毎士れ月 沾涼門 仙魚  
 感とるや 行頬おる 松の月 仙魚  
 芋の名と塗 挿式部 十三歌 尾 芦玉  
 新月やあしとぬ 不内う子店 仙葉堂 五山  
 うつこの水粟きー 十三歌

秦姓丈岳稿

色ろくの香の中よをきて風雅なるハ  
 玉つて凡雅なるハかすくきさくか  
 くぬものどもはさる 風雅の和制ハ  
 よむなるうさすやさく馬けー  
 風ハ調し 其時ハ 雅ハ正し 其時ハ  
 因風大小雅早れよ人のくハ  
 凡雅ハ仁ハうささー 温和よりもの  
 或継人湯浴よハむれを志のぐその  
 けりおてさるの夜家ハいさるハ  
 きかしてやと家来ハぬを人ハ  
 おくれ附とて

たきよふ山をゆくをわづらふそのまじり

世にもよしとまじり ちんちんの雪

又云むつひる人の子も老なるを驚き 我むすめ  
美なるをその子に嫁しとくして 孝道は  
あまの連綿あはれ人あはれもあまの風雅に歌連綿  
風雅の根えたるこそ此道こそまの心をすまへん  
雅人といふもその中にもよれをそめり  
きよよとてむすむなる事よ角もら我意あつ  
家傳よめりて馬上おほる人あり風雅のみらそ  
そのあまのそめり人もやと こと何なる事と  
わくあらうとていふもいふ

詞 傳

人いなる月あり風あり 浪園庵 丈岳  
わく ぬらせぬ 次あり 独吟

我家りあつて 氣あまるなるを  
あんても 九文 衆をまて 深  
茶俵をまよ<sup>脊負</sup>りて 芥川  
情よかけこたふ ちんちん  
夏あを削ていそや ちんちん  
所用の外い ちんちん  
一軍せんを 舟なるの具足下  
翻と 鐘の音よ ちんちん

張の中や終なんさうくす  
の角をえんきく海に物殿  
そく籍の厚さをさるす肉の藝  
出に杭くくくくばー抑せる  
あつく花あうぬをや上聖頂  
結細の香もいさゝせぬ花  
居風呂も一回基も法前にて  
儀も至り金の埋とて  
魚の腹虚の麻く葉くさる  
卵さうせそ子よりけさる  
くがうをぬく遠やるの牛乳年  
又合点さるる山甘の種

店されてたそこ西に用千後を  
新の對の道奥とさせる  
涼しく月をさる握のあし後  
足と目見えをさせる角物  
回船の蓋妻乃結紅のあらまげ  
日本の籍の藝の如く  
白ぬといふの柱を織るすを  
まっく抱付臨波く年  
小さん湯氣入るをさるす  
糊も流流紗結のほきや  
細ぬく終くす花の伝勢  
柳ささきと眠いしく

調和

江原氏

調和門

同苗長子

壺仙堂

先生と因て四十年來かゝる席を承る子今も

登み下す神もよみ神音本と云ふ

風和

あゝい作花と月のまゆ

調和

夜梅

照るや梅もよみ星のまゆ

調和

介我

我尚

周午

同苗

同所

長子

同所

神くそやあろさば花聖の如

介我

糸離や二海のまゆ

我尚

又とあゝ花聖古の星と保と云ふ

周午

良夜

名月や歌へ節句の人通る

咫尺

如影く富士のえちと云ふ

沾涼

名月やらいつくさうぬいせの海

程

秋乃野

片浪は一里の追手聖きい

魚路

惜ととと花聖をまぐ海に首

東巴

唯よりり花聖野の後茶屋

倫仙

虚無僧の下駄ようきまむ

蘭者

よを高く花聖成西の土足外

吟国

百姓の清とつとこれ聖る

有舎

一城をえと云 福の花聖る

沾雪

三輪氏  
不登府内多賀氏  
沾涼門 沾雪

伊賀宗匠

重陽菊

大原千子種の中乃菊草

あきほのれ菊しでこそ秋の悲

長き根や花は流れて菊の尺

きほほの皆流るるき久人島

雲を呑み魚友をやまぐの酒

名のためは井城(き)菊花神

九年酒の目にはきやうり菊

生植

沈む日や海めすくとも葉菊臥

花粟や漬乃耳よ小夜衣

かゆす種(り)里いあきり推の風

十(り)く上流河のほ(り)や梅もとま

千翁門  
雲浪堂

龍角

感生荷

鶴史

向井氏

宅

緑蔭舎

英松

紫茸翁

沾涼

一漁門

雪朝

笠山

山

素丸

賀朝

五山

其遊

竜角家士

旬角

交月人

調山

又之ぬねれ糸子糸子の朱川外  
不化寮よ玉章玉章あまみち外  
琴簞かあありり分分坂坂ややままりり

沾涼

氣歌

房の寺寺の二階もあももの成

房房の寺寺の二階もあももの成

於虫も登り一歌のぬを糸り

侍者の枕枕のむむの寺

ろろの房房やや氣氣遠遠見見るる夕夕廓

雑煉

昔のそそ雲雲籠籠なるぬ秋の山

つきて是是の神神のそそあありり放生會

露門  
竜泉舎

吟市

露岳

紀列善山

智十

水戸住

如水

調柯

五百武



荒 蘭 崎

古来より名所 いろいろの姿の町あり

よきころの耳をこきりてゐる音 魚 路

とろろふー系 ふうねのれある鶴今も

五百歳のまを夏を鳴ッやふ代の鶴

町立沢 秋こそあまのふ

此沢の風意ありーわ〜きん

湯 本 床の角く〜賣は船に耳をこき

小男舟のまの屋賣 角乃野

二子山

夕立〜〜〜 鳥如や〜二子

箱根社 富士のみうの塔〜〜〜て地獄〜

水や〜〜 九尺の釜〜〜葉くぬ

詩 僊

そ〜〜〜九輪川ぬくあう船 魚 路

麦も葉も香梅おろす風 魚 路

寒どけり大〜〜ま〜〜屋を〜 魚 路

よん舟+まらのあまらの五人 魚 路

森あく秋の朔日〜〜も内も〜 魚 路

拍子いなり流 白イ 鶴 路

湯〜〜物の生田やあきて屋の杖 魚 路

振者、富士をかめよかり〜 魚 路

〜〜〜〜〜も匙花あや先 魚 路

経と一度よ味噴大豆の古路 魚 路

秋葉しどろと折れ枯氣止  
 魚 沾 涼  
 裾きんぐりの吹上乃松  
 魚 沾 涼  
 垣曳のまゆ海一舟此渡  
 魚 沾 涼  
 い〜上 呼を林香か 曰  
 魚 沾 涼  
 隅く一龍乃息のゆづり金  
 魚 沾 涼  
 ろれ物干しや町村の鞠  
 魚 沾 涼  
 物いひの花よ思さう海七里  
 魚 沾 涼  
 あまさきあさ六ちよ海又ちよ  
 魚 沾 涼  
 依保姫乃末、妹家々 嫁  
 魚 沾 涼  
 ほろ〜海まぬの控控ほころび  
 魚 沾 涼  
 草鞋をほ〜  
 魚 沾 涼  
 茶酒併飯〜  
 魚 沾 涼

昔によろぎ衰々るる今夫気あ  
 魚 沾 涼  
 目えよ目ええ 目ええ、  
 魚 沾 涼  
 月顔ひえん〜  
 魚 沾 涼  
 何〜や、白〜  
 魚 沾 涼  
 そろ〜の〜  
 魚 沾 涼  
 捧〜  
 魚 沾 涼  
 修政の裏の馬さ〜  
 魚 沾 涼  
 さら〜  
 魚 沾 涼  
 學者に〜  
 魚 沾 涼  
 かしら下〜  
 魚 沾 涼  
 〜〜の膝よ〜  
 魚 沾 涼  
 蕭を扱出ス  
 魚 沾 涼

あきまてむしりの系ね花の人 治涼  
あやのけきさねまら一時

西園の梅東の春帳或日草屋にありいとよしの白の  
いづききや春の三葉をよみて春帳よしの心

秋まねと見えて赤花のうらら  
介我門涼技 春帳 深枝

五常

仁相傘の六分いふはぬる  
千翁息 千翁

義いさく目にも娘さぬ殿  
日 不扁

禮せんせはたつらぬ扇  
日 玲角

智燕又字いづを真に明の梅  
日 奇角

信君う門下車る西園の時  
辰角

玄措

涙り袖梅の長志を伝人  
露沾

小春

拈入乃代とわたりをり神は月  
伊賀上野宗道 握く

一体の袖下臭い真比須隣  
調柯

時雨

森巻すや琴の羽をよさよ  
雪朝

全盛のそなわをえする時  
板垣 賀朝

葛樹の実のちをれし  
千翁門 押場

鳥足も踏の格なるし  
善角門人 善珠

佐賣いづらう影なるし  
調山

草場一跡も涙や一し  
調山

霜 氷

くつをねや馬さへ鳴ぬ草乃上  
恙てもく粒別と四ん糸の照り  
ゆき雪のまら〜の雪  
立雪のまら〜の雪

冬 川

入おをあびはけりやや河系  
勢ひぬき水のさむさや後一紅  
よと雪ハ釜の蓋なりや如川  
川 雨うのぬき粉ハき〜杭乃上  
白雪乃対文長〜氷り川  
牧方の鳴きを〜夜食舟

穀我 英松 周皎 竹裏  
丹志 吳竹 東 臣女 泉 竜  
イセ法村 池ノハタ 服ノ臣女

落 葉

果ハ皆佛の道ハ落葉ハ  
入桐ノ撞のこきれて落葉ハ  
頃日の下粒ハきぬき木の葉ハ  
落葉ハ治郎老ハ小倉山  
起てて麻てけ〜木の葉の〜ハ  
枝と枝をのきをき〜落葉ハ  
尺不ハか乾菴ののち〜  
豆腐ハ尾上越れて落葉ハ  
小庇ハ休んで通る落葉ハ  
一忘れ去今年の外のおと〜

蓮之 雪朝 落鶏 梅宇 東 吳竹 涼宇 紅夕 漁光  
佳風門 佳風門 一漁門 千翁門  
李 條 鈴 角

きし花にて足とて足跡の本葉外  
友とれの名跡は竹のおちこし  
さぬくの境八町 落葉外

天上不測のきあり人上盛衰の質あり  
今も芥子もまじりし

落葉の上を下々み雀うる  
禁にいそ月の扇焚く羽葉くれ  
踊り江の底を流るる落葉外

雪

うつりや袖雪の跡は牛乃角  
白妙やとらぬて七墨水の香  
白炭の香ぬ雪の料理端  
きぬい配の心を越る雪信ひ

郡山夕歌亭

匍匐  
云々  
溶々

玉全  
沾涼  
千本

長水  
賀朝  
千洗  
雪朝

きり幕や五つらなり香かろ  
その香にかひくはや比羽雲擲  
その香や扇根青菊の紅の玉

江戸ハレ

其孫  
扇的  
有林

顔えとや方十町ハ正月気  
あつりや至の梅は袖糸基  
顔えとや香るる娘のみと

枯野

あつりや香るる娘のみと  
さくくは香るるさあぬりは地外  
枯野は香るる香るるさあぬり  
香るるさあぬりの油のかさか

和歌才門

ト宅  
東隣  
百二  
布仙

魚路  
露庭  
夕佳

ふひひのさくばしりさのれのか

千鳥

呉竹

府海に神息に叶ふちりり外

五百武

眠るるも吾吾ちりり敷の淡あき

傘車

それこそと 葛はて打を淡ちりり

樓川

ついで居る物ちりり屋もれ小敷ちりり

楚煉

安房をえとと総を隠すちりり外

紅夕

ぬけしらのさのれをえとちりり外

布仙

寒

枝志ごとく音のちりりこむさる

未石

黄蘗乃鯉のみさもさむさ外

五百武

ちりり氷河根生のちりりさる

千翁門鵬角

秋のちりりさる

露言

蓮の葉や花もちりり中

尺草

尚集発陽の初尺草老人は一集の首説をちりり

ちりりさるをちりりちりりちりり

ありと感懐せしる二千集年ちりりちりり

ちりりちりりちりりちりりちりり

白を傳へちりりちりりちりりちりり

右人の部と今物もちりりちりりちりり

の去此不達のちりりちりりちりり

生植

京宗西

暮四

水仙や馬より横し抱かちりり

沾梅

茶の花や足知しちりり梅のちりり

ちりりちりりちりりちりりちりり

枝を葉と見えちりり分り水仙花

水仙のみさるちりり女武者

露門沾疏軒

吟竹

溶く

雜冬

障子よハ縁子をぬいで梅  
 足跡のそとようきみそんか  
 勢をたて松の腕出ス乃乃滝  
 炭俵あそくや人を八王子  
 くらあそく楠玄湯 茶汁  
 ぶくくーやまのくくーの二里杭  
 ぶくくー乃色や厩のくくー乃乃  
 黄よりひく玄婦一衣配  
 級ぶくく様のひとつ也淀乃襦  
 年尾  
 明日晴ん乳まをえそく福壽草  
 沾涼  
 布有梅安千好沾左莎  
 仙佐五祖露夕涼隣鶏

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像  
 杉白木御長五寸五分  
 頓阿法師作 住吉奉納一軀  
 御筆後以岸姫松作之

氷正一位乃き傳ハ阿法師の作宗祇法師恭敬  
 乃其傳にして宗牧了りつる伊賀國上野飯東氏  
 喜三 生国尾州清洲織田家士 後為醫曹藝居伊賀國 乃宗牧の門人ありし  
 乃くくくを附屬一息政安 洲左衛門落後父 号三悦沾涼  
 傳了而後服部土芳 半左衛門ト云 芭蕉高弟 にあそくく年あり  
 二十余年以茶室永のころ平政卿に執くの

初此係を尋らるる土芳も早古人の妻なり  
子なり誰にこそくばりて安の云土芳乃  
甥本津宗七郎と云ふ事ありてありて道つと  
同く宗七云土芳在世の時脚もく廿余日と  
傳り連継りてありて後此係を咨嗟して  
賦詩して後よりして去る人のため書さ  
天神の宝號ありて出るとの人の紙よ

天満宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貫所持

と記しとて書かまむてゆくは長門小  
乃人なるよしして于時享保十四巳酉乃春道芝と云  
小よりつむのこ人北凡倫仙余之助ト云に  
我より人唐の像あり是はこれ芝にありて連歌所

乃不持りて認あり係し連歌の會あり  
松をひあらしと筆を削り流るる係し  
今の我より應せとて流るるありておれり  
五月廿二日倫仙此係をとりて書かまむ我より  
ありて全ねし職分の家ありてありて  
辭して志つくの事をして教にんと傳り  
そのとら人の名を問ぬ是山口不貫也生国長門国蒲州  
享保巳七月卒ス  
于時七十二  
住所ハ芝 門人丹野繁柳 道芝ノ子受之と云ふ  
ありてありて歸影なりてありて信ありて  
ある茅屋にともありてありてありて當所  
鎮守神田宮の境内と遷座なりとありて

崔下菴謹書

人唐大明神法樂

影うつすわくと新樹乃高角山  
硯より石見の出て朝清の  
涼しき海のくの帆の肩

雀菴涼  
菊岳布仙  
同梅五

造立の連各法樂

六の神の鳥帽子なや白牡丹  
帆かきこの海平茂るや神の破  
あつ申の月一茎し花外木  
初多井一本まに浮くや雲の破  
この垣もあまの葉の涯なり  
みまゝのやみくれて通る花さる  
時とくやをくくむく神標

宇田川末石  
笠井魚路  
中島五良  
河津玉風  
小森笛之  
岩田涼之  
北尾倫仙

申すくや歌の神法のおく  
神縁はく先くさくはく  
ぬくくはく明くのまの  
時より唯今在るの實

久米田賀朝  
北尾千洗  
栗本雪朝  
川勝丈岳

○持本人丸

古今

セケの大事の内なる石見國戸田郡の

人家の傍の本のまやう童形を出現と云り

石見國より化生と云事 口史

神龜元年二月十八日卒 口史

持統帝文武帝聖武帝平城帝等の御代に寄

式人の云其御家には古今の事その集乃

中の奇もみまうゝ家歌の極さぬまゝとてたてて云  
古今集の中の月やあゝぬまやむうゝと云哥の  
事を取るに大切の事とて仰々たるの経巻物語  
乃中の月やあゝぬまやむうゝと云哥とて  
ゝを強ひてとてゝとあゝぬまやむうゝと云  
かゝれは事なり  
人唐四人を 橘本倉 山田倉 玉子倉 押海倉  
あゝぬまやむうゝの人なり

此一部三巻 泊涼子乃後縁

泊涼子乃後縁 彼機と建家カ名始  
誹祖以身當世了至と門弟と携家  
宗通乃統々と紀一匡一々  
系傳と詳に してて縦々  
次は古往此明師よと累世に先達  
及現在作者乃後与集くこれと  
緯とち一 最後は与合歌仙等

微くは雑夏と紋や——く控候  
あくよそ——きり古風の公道あり  
中比の伊をうゑ今れ物好き波り事  
な——吟嘯乃泣眸と情——こと  
取よ足ふ物あり——やと——云爾  
涼子乃請よ遊て野叟卜宅漫に  
跋寸頗鄙陋と恥ふ而已

てんきん

古

